Improvisation Basic vol.05
小節数やリズム、コードチェンジの「範囲の感覚」を掴む

では、Improvisation Basic vol.05、始めていきましょう。

今回は、タイトルにもある様に「範囲の感覚」についてですね。

「音楽は時間の芸術」と表現されることもある様に、常に一定方向に進んで(展開して) いる事になります。

この時、あるポイントからあるポイントまでを、拍や小節、コードチェンジやフレーズパターン等で区切りをつける事が出来るわけですが、この区切りを「一つの範囲」として、先に身体に馴染ませてみよう、と言う内容です。

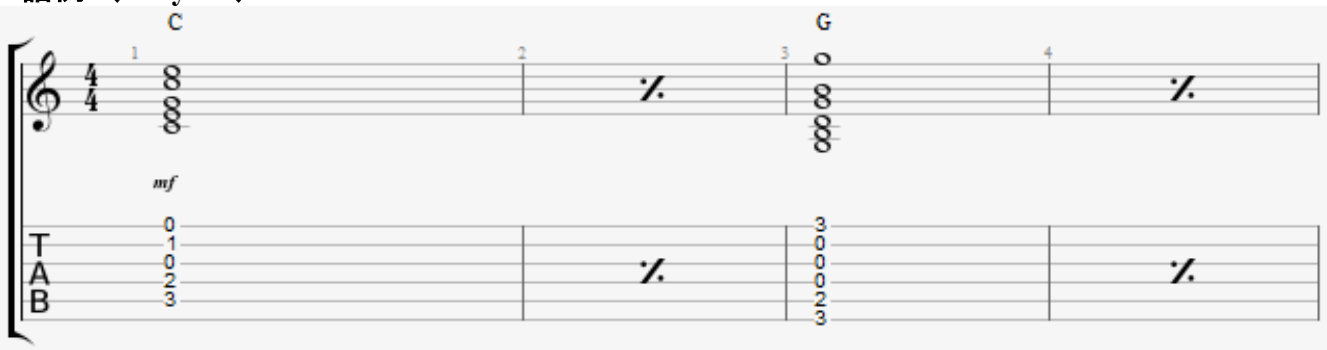
これについては、「区切り」の基準を何に設定するかによって様々な解釈が出来るので、まずは 4/4 拍子のリズムに限定して考えてみましょうか。

そして「区切り」の基準を、「その拍子の中にいくつ音符が入るのか？」と、「小節数」、「コードチェンジ」の 3 つの観点から見てみます。

では、この説明だけだと少しわかりにくいかも知れないので、実際の譜例で考えてみましょうか。

弾くコード自体は何でもいいのですが、例えば、以下の様な進行があったとします。

譜例 1、key=C、Ⅰ－Ⅴ



見ての通り、C と G が 2 小節ずつの進行ですね。

拍子が 4/4 なので、1 小節辺り 4 分音符であれば 4 つ、そしてそれが 1 つのコードあたり 2 小節続くので、計 8 拍(4 分音符 8 個)でチェンジになります。

で、もしあなたが、この譜例(進行)で自由に弾いてくれと言われたとして、ある種、先読

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

み的に、「4 分音符 4 個×2 でチェンジ」と言う、『時間や範囲の感覚』が先に想像できるかどうか？と言うのが今回の趣旨です。

1 小節目の 1 拍目で C コード関係の何かを鳴らし、その後、4/4 拍子なら、

「タン、タン、タン、タン(1 小節)、タン、タン、タン、タン(2 小節)」

と言う拍の時間分続いて次の G にチェンジ、そしてそれがまた同じ長さ続く、というイメージを、例えばギターを持ってなくても出来るでしょうか？

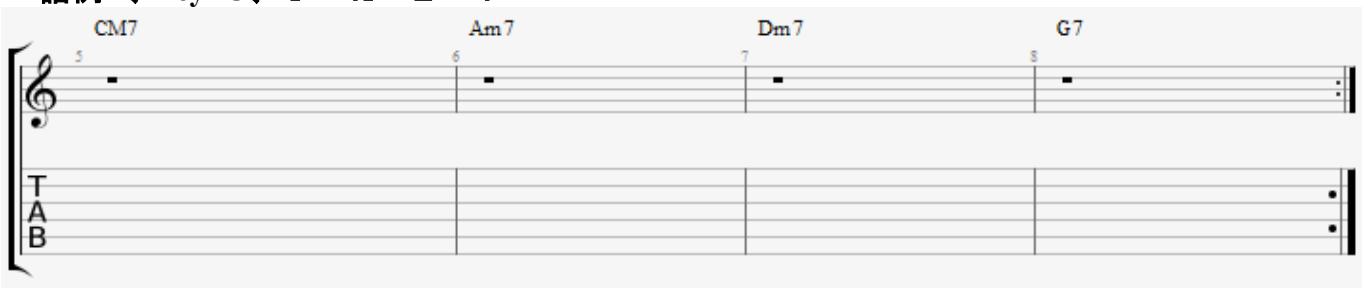
譜例 1 の進行だと少し簡単すぎるので、実感がわかないかも知れませんが、仮にもっと複雑になっていったとき、そのコードチェンジのタイミングや範囲の感覚が先に頭(身体)にあるのか？と言う事です。

これがコードチェンジが忙しくなったり、テンポが速くなったり、リズムパターンが複雑になったりすると、どんどんプレイが後手に回っていき、アドリブどころでは無くなってきます。

自分がそうなってしまいそうな曲をやる時に、例えば、事前にコード進行のみをゆっくり弾いてみたりして、チェンジのタイミングとサウンドを先に把握しておく、と言う練習をしてみましょう。

例えば、以下は定番中の定番である 1-6-2-5 の進行ですが、これがバッキングで鳴っていて、いきなり「じゃあ、この上で何か適当に弾いてください」と言われたら、おそらく多くの人は、「先読み」でも「同時進行」でもなく、「後追い」の感覚で弾くことになるでしょう。

譜例 2、key=C、Ⅰ―Ⅵ―Ⅱ―Ⅴ



一定以上、この進行を使って練習した経験でもない限り、最初の CM7 が鳴ってから、次の Am7 が鳴るまでの時間の間隔、そのコードのサウンドや構成音、さらには自分が奏でるフレーズの流れやストーリーまでを、早い段階で予測することは不可能でしょう。

これは究極的には、「経験」や「慣れ」がどの位あるのか？にも繋がって来るのですが、

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

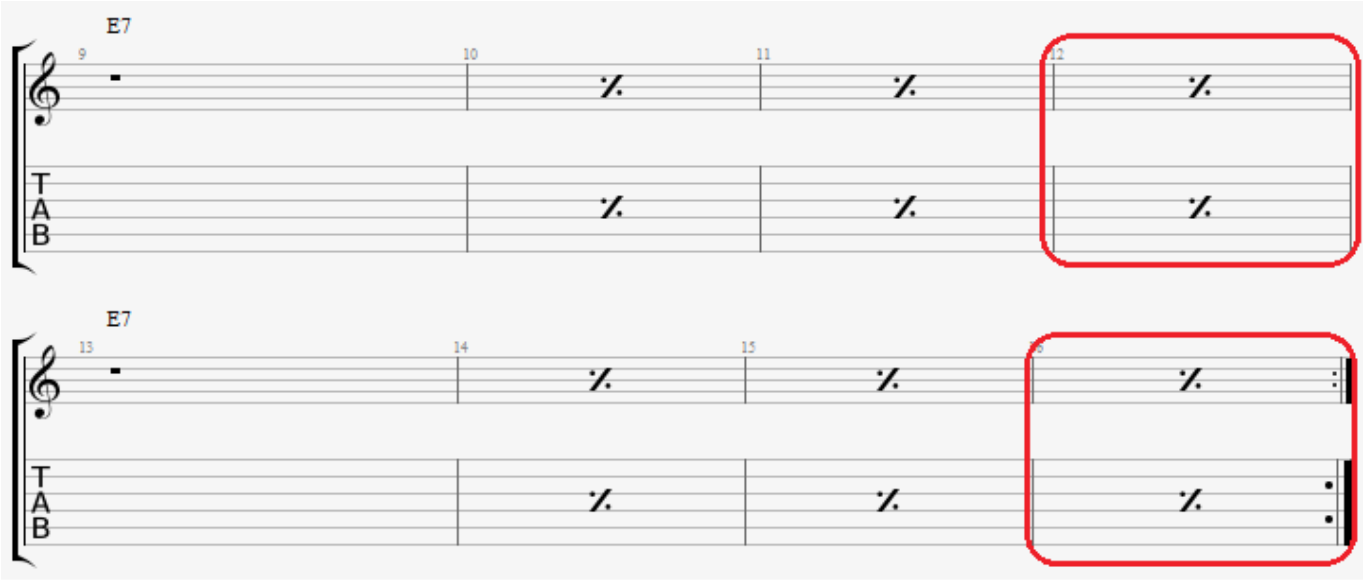
普段の練習の時から意識しておくと、あらゆるものの呑み込みが早くなります。

今は一つの要素として、「コード進行(チェンジ)の範囲の感覚」を挙げましたが、例えば他にも、「(一定の)小節数の感覚」と言うものもあります。

多くの楽曲では、A メロ、B メロ、サビ、の様な各パートが偶数小節で一塊になっていて、大概の場合、ワンパート分が 4、8、12、16 小節辺りで纏められていますね。(※コード進行の一巡も大体そう)

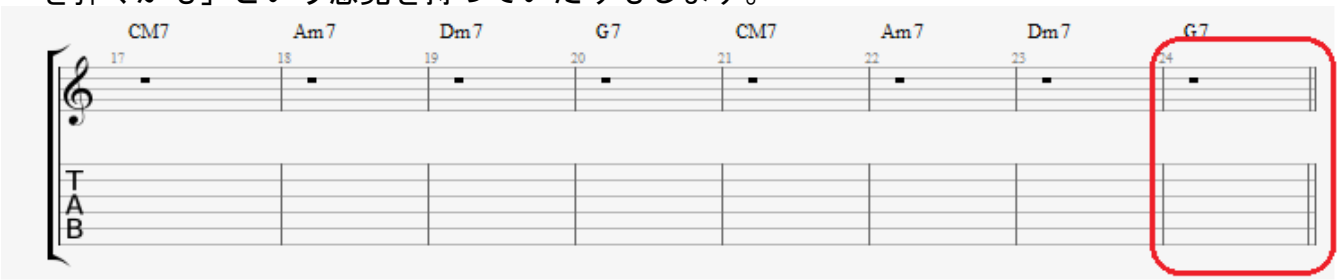
この時、演奏経験が豊富な人は、良く出てくる小節数(の範囲)は身体が覚えていて、「そろそろ次に変わるな」と言う感じで、考えたり数えたりしなくても感覚で分かるのです。

例えば、小節数を見失いやすい、コード一発ものの進行でアドリブを取っている場合も、何も考えていなくても 4 や 8 小節目の辺りで、アタマに戻る様なフレーズを弾けたりします。



演奏に慣れていると、何も考えていなくても、範囲の区切りを感じている。

他にも、歌モノの楽曲だったりすると、各パートの終りの小節などに「ここでフィルインを弾くかも」という感覚を持っていたりもします。



この辺に何かフィル的なものを入れるかも？と感じて(考えて)いたりする

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

この辺り、メロディーとの兼ね合いもあるので、あくまで入れる可能性がある、と言った感じですが、演奏に慣れている人は、自然とそういうプレイをしたり(出来たり)しますね。

で、最終的に、どうやったらこう言った能力が身に付くのか？と言う事になるのですが、基本的には色々な曲を沢山弾いてみるのがベストです。

とは言え、「そこまで行くのにどんだけ掛かるねん」と言うのが正直な感想だと思うので、普段から意識出来るポイントがいくつかあります。

以下にまとめてみますので、普段の練習に取り入れてみて下さい。

・コード進行のみを、そのサウンドを良く聴きながらじっくり弾く

・その楽曲特有のリズムフィールやメインメロディーなども想像できるように曲を聴きこむ

・覚えたと思ったら、ギターが無くても、その進行やサウンド、メロディーを想像できるか試してみる

・鼻歌などでメロディーを歌いながら、同時に、頭の中で、バックで鳴っているコード進行や楽器のフレーズ等を想像できるか試してみる

・ギターでメロディー(もしくはアドリブならばソロ)を弾きながら、同時にバックのサウンドを頭の中で想像できるか試してみる。

・ギターでコード進行(バッキングパターン)を弾きながら、メインメロディーやアドリブソロを想像するか、鼻歌で歌ってみる

ゆっくりでも良いので、大体、この位が出来るまでその楽曲を把握していると、実際の演奏の際に「後追い感」が無くなってきます。

今回の内容は、ギターをもってどうこうする、と言うよりは、「楽曲の認識法」みたいな話だったので、少し効果がイメージしにくいかもしれません。

ですが、こう言った抽象的な内容は考えていれば、自分のレベルが上がった時に意味がはっきり見えてきます。

最初はなんとなくでも良いので、少し落ち着いて、今弾きたい曲の外堀を埋めていくよう

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

な感覚で取り組んでみて下さい。

後はやはり、このテキストで紹介した方法以外にも、楽曲の把握に役立つ要素は沢山あると思うので、自分なりに方法論を作っていってもいいですね。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved